関西自然保護機構会報 20 (1) : 41－44, 1998

お寺の森での環境教育

フィールド　ソサイエティー代表　　久　山　喜久雄

ENVIRONMENTAL EDUCATION IN A BUDDHISM DIVINE FOREST

Kikuo HIISAYAMA *Fieald Society*

はじめに

「法然院森の教室」は，1985年以来続けられてきた環境をテーマにした学習活動である。

法然院のご住職の「お寺を新たなコミュニケーションの場にしたい」という思いと，市民の「お寺という，様々な出会いを果たせ，自然環境に恵まれた場を活用したい」という思いが出会って始められた。お寺と市民の二人三脚でこれまでに105回を数える教室が開催されてきた。

現在も，森の教室は隔月程度のペースで継続されている。教室のほかにも自然保護，環境教育などのテーマで，観察会や講演会を行い，さらには写真展や音楽会の催しも行ってきた。それ故に幅広い人々に親しまれ，地域に根づいた活動になってきたようだ。

歴史・文化を感じるお寺という空間は，市民にとって身近な場である。ところが，その「身近な場の自然」には，貴重なほどの豊かさが保存され，様々な生き物が生息している。それを知ることは，自然の素晴らしさに気づくことであり，そのようなお寺の森を通して学べることとは，「自然と人との共生」ということであった。

1988年には「森の教室ジュニア版」として，子供に対象をしぼった自然学習活動「森の子クラブ」も開始された。地域に住む子供たちだけでなく，大阪や京都の都心に住む子供たちにも，自然の興味深さを伝えてきた。

上記のような活動の経過によって，1993年，「共生き堂」（以下通称名「法然院森のセンター」）が建設された。それまでの「法然院森の教室」などの活動を更に発展させ，広く活動で得たものを伝えていく「場」としての機能を持つことを目的としたものである。

ここには事務室と常設展ギャラリー，ワークルーム兼図書室（里山文庫）を備えており，その管理・維持と，その場を活かした活動の運営を目的に，環境学習市民グループ，フィールドソサイエティーが発足した。

現在，フィールドソサイエティーは，「法然院森の教室」「森の子クラブ」を含め，様々な環境学習プログラムを主催している。

フィールド紹介

私たちの主なフィールドは，法然院の境内林を中心に，その背後の大文字山や，その前寄りに位置する「哲学の道」，疏水分線を含めた地域一帯である。

1．法然院の境内林の森

京都は三方を山に囲まれた盆地である。町の中心部からあまり遠くない山々のすそ野には多くの寺社があり，寺社林がつらなることで地域本来の自然の姿を留めている。

この辺りの植生はヤブツバキやツブラジイなどに代表される暖帯性照葉樹林であるが，その構成樹種であるナナミノキ，カナメモチ，ソヨゴ，タラヨウ，サカキなども，法然院のお寺の森で，よく観察できる。森の生態系は優れ，菌類や昆虫などの小さな生物から大型の哺乳類にいたるまでが，生活し続けている。そして法然院の周辺を含めると，半自然的な境内の庭や墓地などの開けた場所，そして森と，狭いながらも様々な環境があり，自然の多様性を作りだしている。そのような環境に実際に触れることは，大切な自然学習であると思われ，観察のしやすいキノコ，モリアオガエル，ムササビなどを対象とした観察会を行っている。

2．大文字山

歴史都市である京都は，人の暮らしによる里山の利用の歴史も長い。

日本各地で人のくらしを成り立たせるためにもともとの植生は破壊されたが，建材や薪炭を得るための伐採・下刈りと，利用地拡大のための火入れなどが繰り返され，その後発達してきた新たな植生（アカマツ林やコナラ林）を常に管理して里山は維持されてきた。

里山であった大文字山にも，尾根筋にアカマツ林，谷筋の古生層の地帯にコナラ林が残されている。管理が行き届き，明るい林内が保持されてきたため，その環境下で暮らす昆虫（とりわけ蝶など）は極めて豊富だったらしい。

しかし，薪炭の利用がなくなった現在，森は原植生へと変化している。このような典型的な遷移する森をフィールドに持つことは，里山の今後について学ぶ機会に繋がる。

3．「哲学の道」

住宅地や観光地でもある疏水分線をともなう「哲学の道」では，人工物を含めて水辺環境や「街の環境」について学んでいる。

環境学習では，人間の自然に対する負荷や今後の街づくりも考えなくてはならない。そのためには，「街の環境」を観察することによって，生活の視点に立った具体的な発見が必要になる。直接暮らしとかかわった環境に関心をよせることにより，自然の変化と人間活動の可能性をも捉えることができる。

法然院森のセンター紹介

法然院の森のセンターはフィールドソサイエティーが運営している。山小屋風の小さな建物であるが、1階段に事務局と展示スペース（ギャラリー），階下にワークルームを兼ねた図書室（「里山文庫」）が備わっている。

展示のテーマは「自然はともだち」。

お寺の森の自然の豊かさや京都の自然について知ってもらいたい。とくに，地域の人々に足元の優れた自然の姿を伝えたい。そして，子供たちに，自然の楽しさや不思議さ，そして大切さを感じてもらいたい。そんな願いを込めた展示となっている。

表1　センターの展示の内容.

主な内容は以下の通り。

1．大文字山の岩石（実物標本展示）
2．お寺の森の菌類（標本・写真・キノコ染）
3．大文字山の哺乳動物（ぬいぐるみによる展示）
4．お寺の森の生き物（写真展示）
5．大文字山で見つけた森の宝物（実物）
6．活動の成果展示（常設ではない。マップ，木工，手作り楽器など）
7．クイズ・さわって遊ぶ展示
8．世界のふくろうコレクション
9．日本各地の土の標本

10．その他，季節に応じた展示

表1の展示はいずれも手作りで小規模ではあるが，環境学習や地域学習などで利用する団体は多い。スタッフによる解説も行っている。地質時代の地形の成り立ちから，森のなかでの生き物の役割，発見の楽しさまで説明できる順序に配置されている。

表内のキノコ染とはキノコを使った染色である。菌類について学ぶことは，森の生態系を実感することである。キノコという，「食べること」「毒キノコ」という事柄が先行するだけに，新たな魅力を見つけ，キノコに関心を持ち森の中での大切な役割をより知っていきたい。そんなプログラムである。

また，「大文字山で見つけた森の宝物」という展示では，森の自然をイメージしてもらいたいという主旨で，森で発見した様々なものを展示している。それらは珍しいものというわけではなく，この森で普通に出会えるものも含まれている。展示しているものは，ムササビの食痕・フン，落ちていたハチの巣，野鳥の古巣，野鳥の羽，イノシシの毛，などである。

階下の里山文庫では，各種図鑑，写真集，環境，自然関係の本などが，随時閲覧できる。山から下りてきて調べものをする際などにも，大いに利用して欲しい。子ども向けの本も多数揃えてある。貸し出しは行っていない。

このスペースを，フィールドソサイエティー主催の活動時にワークルームとしても使用している。

活動紹介

1993年以来，フィールドソサイエティー主催の活動は次のようなものが展開されている。活動を支え，参加頂いているのは，賛助会員（個人：年間一口2000円，団体：10000円の賛助）の方々である。現在，約500名の登録があり，会報を送付している。家族の方の参加もあり，どのプログラムも幅広い年齢層で行われることは，一つの特色となっている。

1．オープンルーム

法然院森のセンターを地域に開かれた場とするための企画。ワークルームに集い，様々な自然体験プログラムを行う。1997年度は「哲学の道」マップ作りも継続的に年4回行い，報告を兼ねた絵地図「てくてくたんけんマップ」を作成した。

2．法然院森の教室

フィールドソサイエティーの母体でもあるこの教室は，今も法然院を会場に，年間5～6回，主に講演会を行う形で継承されている。専門家による話を聞くことは個々の自然観の広がりに繋がる。主に大人向けのテーマが多いが，参加に関しては全く制限がない。

3．自然観察会

自然観察活動を，「シリーズ自然観察会」として企画している。子供から大人まで，自然観察を気軽に楽める場として提供され，自然，環境を考えるきっかけを掴む機会となっている。

4．エコ・ツアー

豊かな自然や人々の暮らしに触れることを目的にした旅の企画。信州・開田高原にある私たちの合宿所を利用したり，また，四万十川・トンボ王国・ホエールウォッチングなどと，楽しい旅の企画も行った。

5．森の子クラブ

子供たちへの環境教育の根幹となっている。年間の会員制で，一貫したスケジュールを持って一年間を一つの活動と見なしている。小学3年生から中学生までの会員が，身のまわりの環境や仲間づくりをテーマに自然の中で共に活動するという

ことで学んでいる。

ホームフィールドは法然院の森や大文字山であるが，農作業体験にでかけたり，信州に合宿に行ったりしている。また，「お寺に泊まる」プログラムでは法然院に宿泊し，夜の森の観察を行う。そして，法然院森のセンターは，森の子クラブにとっての拠点としても機能している。

6．その他　インタープリター講座

環境教育という言葉も市民権を得て，現場でリーダーとして力を出したいと思う人々も増えてきた。それには，人と自然を繋ぐための伝達能力をより実践的に身につけなくてはならない。自然の成り立ちやその働きに関心を持ってもらうためには，解説者（インタープリター）になろうと思う人自身実際の自然の中で一つ一つの生き物の不思議に触れ，リーダーとしての体験を積むことが必要であろう。そんな事柄に応えたいと，インタープリター講座（講義，野外実習など）を開講している。

おわりに

様々な切り口で自然や環境ということばに迫り，次世代により良い環境を残し，自然と接する方法をも伝えていきたい。そんな個々の思いが，環境学習の市民グループ，フィールドソサイエティーを支えている。

企画も，組織も，極めて柔軟なものではあるが，「法然院森の教室」時代から受け継がれている「足元からの活動」という主旨で，今後も，人と自然，人と人の出会いの場を提供していきたいと思う。

（ご案内）

身近な自然に目を向けることのおもしろさを語ったエッセイ集「身近なときめき自然散歩」（久山喜久雄編著・淡交社刊）が刊行された。